

14 石板 (せきばん)



《縦110cm、横166cm、厚10cm、石質：緑泥石片岩》

この石板は、昭和50(1975)年3月、市内石原の市道の工事の際に、東武熊谷線の土手(秩父道志るべ付近)に放置されていたものを移設したもので、それ以前は、小川の石橋として利用されていました。一部に加工された痕跡があることから、石原古墳群の古墳石室の天井石の可能性があり、保存のため同年5月24日に園内に搬入し、庭石として保存しました。

上右写真は、昭和50(1975)年3月8日に、現地での調査の様子を撮影したものです。

15 供養塔 (くやうとう)

《高201cm、幅75cm、石質：安山岩、造立年：元文5(1740)年》



施主は、梅澤又右衛門・梅澤勘右衛門。塔身の四面には梵字が彫られています。

西面：タラク(虚空蔵菩薩)・南面：ウン(阿閼如来：あしゅくによらい)・東面：アク(不空成就如来)・北面：キリーク(阿弥陀如来)

16 紫石句碑 (しせきくひ)



斎藤紫石とその句碑
翁七十五回誕生日

《高120cm、幅140cm、造立年：昭和34(1959)年5月》

斎藤紫石後援会により建てられた斎藤紫石自筆の句碑。「老いくの 苔に花咲く 心地かな」紫石が晩年の心境を詠んだ句です。

上右は、昭和35(1960)年9月18日に撮影された自身の句碑の脇に立つ斎藤紫石で、斎藤紫石後援会によって発行された絵葉書です。

斎藤紫石

(さいとうしせき：1885-1964)：政治家・文人

熊谷市鎌倉町生まれ。本名茂八。大正10(1921)年熊谷町長に当選して以降、県議会議員を歴任し、昭和14(1939)年に熊谷市長となる。俳句に親しみ、紫石と号し、俳誌「鮎」を刊行する。政界引退後は、市内石原に「紫石巢」と称する寓居を構え、独自の俳句を探索するため幽居生活を送りました。熊谷市名誉市民第1号。

17 天柱石 (てんちゅうせき)

《長264cm、幅17cm》



18 天柱石 (てんちゅうせき)

《長286cm、幅21cm》



現在「天柱石」と呼ばれていますが、かつては「筭石(こうがいせき)」と呼ばれていました。

文禄の役(1592-1593)に際し、加藤清正が朝鮮から、「袖振り石」とともに持ち帰ったと伝えられる石です。

加藤清正が豊臣秀吉に献上し、その後忍城主の松平忠吉が譲り受けたとされ、明治4(1871)年に竹井澹如が松平家から引継ぎ、星溪園に設置しました。

元は一つの石でしたが、忍城へ運ぶ際、5つに割れてしまったと言われており、他の2つの天柱石も、庭園内に配置されています(③)。

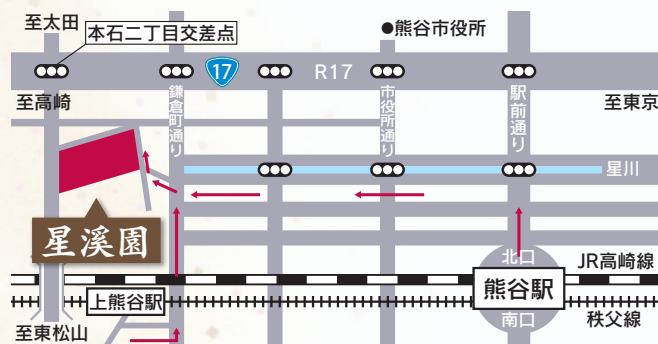
19 十王供養塔 (じゅうおうくやうとう)

《高106cm、幅51cm、石質：安山岩、造立年：近世》



十王とは、道教や仏教で、地獄において死者の罪状の審判を行う判官10尊の総称。秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、變成王、泰山王、平等王、都市王、五導輪王の十王を指す。亡者は、初七日に秦広王の庁舎で裁判を受けるのに始まり、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日、百か日、一周忌、三回忌の十回まで次々に各王の庁舎で罪の軽重を判定され、次の世の処世を定められるといわれています。

生前に十王に対して供養を行った者は、死後十王の裁判を受けるとき、業報を軽くすることができると言われており、この思想が近世庶民の信仰を集めるに至ったと考えられています。



◆JR高崎線熊谷駅から徒歩18分／秩父線上熊谷駅から徒歩3分

熊谷市立江南文化財センター

〒360-0107 埼玉県熊谷市千代329番地
TEL:048-536-5062
FAX:048-536-4575

熊谷デジタルミュージアム

このリーフレットは5,000部作成し、1部当たりの単価は約52円です。

熊谷
星溪園
GARDEN

星溪園の石造物

星溪園は、近代の熊谷市の発展に大きな功績を残した竹井澹如(たけい さんじょ)によって、明治の初め頃に造られました。当初は「池亭」と呼ばれていましたが、昭和二五(一九五〇)年熊谷市が譲り受け、翌年「星溪園」と名付けられました。星溪園は、星溪寮・松風庵・積翠閣の三棟の建物と庭園で構成されています。庭園は、池泉回遊式庭園となっており、澹如が集めた名石・古塔が配置されています。



熊谷市指定文化財 記念物 名勝

星溪園

.....せいけいえん.....

- ◆〒360-0046 埼玉県熊谷市鎌倉町32番地
- ◆電話 048-522-9389
- ◆休園日 月曜日・12月27日～1月4日(月曜日が休日の場合は翌日)
- ◆開園時間 午前9時～午後5時(11月1日～2月28日は午後4時まで)

1 星溪園記碑 (せいけいえんきひ)



再建碑：令和5年造立



旧碑：昭和8年造立

《再建碑：高100cm、幅110cm・旧碑：高105cm、幅147cm》

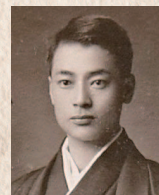
星溪園の由来が記された碑。撰文は竹井耕一郎(1868-1945)、旧碑の書は酒井天外(1875-1942)。

竹井澹如が、池を整備し樹木を植え庭石を配し、茶室を設けたことが記されています。

漢詩は、小野湖山(1814-1910)が、明治12(1879)年7月に星溪園を訪れた際に詠んだものです。

竹井耕一郎

(たけいこういちろう：1868-1945)：法学者・文人



竹井澹如の長男で、星溪と号しました。早稲田大学・一橋大学で憲法学の講座をもち、新進気鋭の学者として名をはせました。

また、漢籍の造詣深く、詩文にも優れていました。昭和5(1930)年には、積翠閣を新築し、熊谷を文化的な活動拠点としました。

2 五輪塔 (ごりんとう)

《高51.5cm、幅20cm、石質：安山岩、造立年：中世》



五輪塔の空風輪・火輪・地輪で構成され、水輪を欠いています。地輪には4面に梵字(ア・アー・アン・アク)が刻まれています。

五輪塔は、密教において創始された塔で、上から宝珠形の空輪、半球形の風輪、宝形造の火輪、球形の水輪、方形の地輪で構成されます。

3 天柱石 (てんちゅうせき)

《長214cm、幅19cm》



現在「天柱石」と呼ばれていますが、かつては「筭石(こうがいせき)」と呼ばれていました。

文禄の役(1592-1593)に際し加藤清正(1562-1611)が、朝鮮から「袖振り石」とともに持ち帰ったと伝えられる石です。

加藤清正が豊臣秀吉(1537-1598)に献上し、その後忍城主の松平忠吉(1580-1607)が譲り受けたとされ、明治4(1871)年に竹井澹如が松平家から引継ぎ、星溪園に設置しました。

元は一つの石でしたが、忍城へ運ぶ際、5つに割れてしまったと言われており、他の3つの天柱石も、庭園内に配置されています(17 18)。



④袖振り石 (そでふりいし)



《高92cm、幅56cm》

現在「袖振り石」と呼ばれていますが、かつては「誰ヶ袖手水鉢(だれがそでちょうずばち)」と呼ばれていました。

文禄の役(1592-1593)に際し、加藤清正が朝鮮から「天柱石」とともに持ち帰ったと伝えられる石です。加藤清正が豊臣秀吉に献上し、その後忍城主の松平忠吉が譲り受けたとされ、明治4(1871)年に竹井澹如が松平家から引継ぎ、星溪園に設置しました。

⑤十王供養塔 (じゅうおうくやうとう)



《高69cm、幅45cm、石質:安山岩、造立年:寛文2(1662)年12月》

北面に「寛文二年十二月」「無縁皆是成佛 三界六道一切衆生□□」と彫られています。

東面には、死後47日目に裁く五官王(本地仏は普賢菩薩)が、生前に犯した人間の罪の重さを秤で量っている様子が刻まれています。

⑥宝篋印塔 (ほうきょういんとう)

《高49.5cm、幅25.5cm、石質:安山岩、造立年:中世》

上端の宝珠は近世のもの。笠の下に基礎と反花座(かえりばなざ)があり、塔身を欠いています。

宝篋印塔は、飛鳥時代には經典の宝篋印陀羅尼(ほうきょういんだらに)を収めた経塔で、これを礼拝することで罪障が消滅し、苦を逃れ、長寿を得ると信仰されました。その後中近世になると、墓塔・供養塔として用いられるようになりました。



⑦石門 (せきもん)

《高190cm、幅120cm、石質:珪化木(けいかぼく)》

珪化木を柵木として用いたシンプルな冠木門(かぶきもん)。



珪化木は、中生代や新生代に地中に埋没した樹木の幹や根などが、地層からかかる圧力によってケイ酸分の多い地下水などが染み込み、長年の作用により材質が化石化した樹木のことです。

⑧青邨句碑 (せいそんくひ)

《高102cm、幅91cm、石質:安山岩、造立年:昭和57(1982)年10月》



夏草埼玉県支部により造立された山口青邨(やまぐちせいそん)自筆の句碑。

「夕紅葉 鯉ハ浮くま 人去りぬ 青邨」

この句は、青邨が、昭和25(1950)年11月に星溪園を訪れた際に詠んだもので、池の水面に映る夕紅葉と行き交う鯉の様子を情感込めて表現しています。

山口青邨

(やまぐちせいそん:1892-1988):俳人、鉱山学者

盛岡市生まれ。鉱山学で東京大学教授となり、昭和22(1947)年に水原秋桜子らと東大俳句会を興し、俳誌「夏草」を主宰しました。また、高浜虚子の指導を受けて「ホトギス」の代表的俳人として活躍しました。

⑨宝篋印塔 (ほうきょういんとう)

《高76cm、幅35cm、石質:安山岩、造立年:中世》

近世の宝珠を笠上に載せています。宝篋印塔の笠・基礎・反花座が残存し、塔身を欠きます。

宝篋印塔は、飛鳥時代には經典の宝篋印陀羅尼(ほうきょういんだらに)を収めた経塔で、これを礼拝することで罪障が消滅し、苦を逃れ、長寿を得ると信仰されました。その後、中近世になると墓塔・供養塔として用いられるようになりました。



⑩五輪塔 (ごりんとう)

《高55cm、幅45cm、石質:安山岩、造立年:中世》

五輪塔の空風輪と地輪のみ残存し、火輪・水輪は失われています。空風輪は、近世のものを組み合わせています。

五輪塔は、密教において創始された塔で、上から宝珠形の空輪、半球形の風輪、宝形造の火輪、球形の水輪、方形の地輪で構成されます。

五輪塔の脇には、安山岩製の石臼(近世:下臼)が置かれています。



竹井澹如

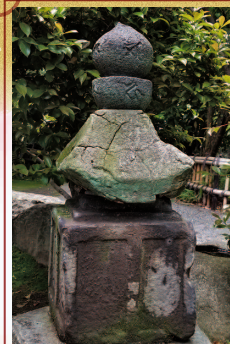
(たけいたんじょ:1839-1912):政治家・文人

慶応元(1865)年、熊谷宿本陣の竹井家を継ぎ、当主となりました。大隈重信・渋沢栄一らと親交があり、熊谷県誕生に尽力しました。初代県会議長をつとめ、産業土木面でも大きな功績を残しました。

また、俳人として「幽谷(ゆうこく)」と号し、内海良大(うつみりょうたい)を熊谷に招いて、俳句の研究結社をつくりました。



⑪供養塔 (くやうとう)



《高88.5cm、幅38cm、石質:凝灰岩(基礎は安山岩)、造立年:応永10(1403)年》

本来は、別々に建てられていた五輪塔(空風輪・火輪)と宝篋印塔(基礎)の部材を組み合わせたものです。空輪部と風輪部には4字ずつ梵字が刻まれています。基礎部の格狭間(こうざま)には、東面に「正月」「八日」、西面に「応永」「十未癸」と刻まれています。

⑫芭蕉句碑 (ばしょうくひ)

《高92cm、幅70cm、造立年:寛政4(1792)年》

「春もやや 気色ととのふ 月と梅」

芭蕉50歳の句。厳しい冬が過ぎ、徐々に春めいてくる早春の情趣を、月と梅の取り合わせで描き出しています。画讀句として芭蕉が好んだ句です。

碑裏には、「太蕪(たいぶ)」「秋瓜(しゅうか)」の句と、天明から寛政期にかけて活躍した熊谷の俳人「官鯉(かんり)」「笑牛(しょうぎゅう)」「雪叩(せっこう)」の名が刻まれており、江戸時代中期に、江戸と熊谷の俳人の交流がうかがえる句碑です。



太蕪 (□-1774):古川太蕪。江戸時代中期の俳人。

秋瓜 (□-1790):多少庵秋瓜。江戸時代中期の俳人。

官鯉 (江戸時代後期):竹井新右衛門。江戸後期の熊谷宿の本陣竹井家当主。

笑牛 (1728-1796):須賀市左衛門長栄。建部涼袋門下の俳人。

雪叩 (1732-1799):野口雪江。書家。寛政の三名筆の一人。

⑬鹿児島寿蔵歌碑 (かごしまじゅそうかひ)

《高100cm、幅80cm、厚12cm、造立年:平成31(2019)年3月》



鹿児島寿蔵熊谷草歌碑建立呼びかけ人一同により造立された、鹿児島寿蔵(1898-1982)自筆の歌碑。「熊谷草 なくてかなはじと 星池に 植ゑて福布くしき 花を咲かしむ」。これは、昭和55(1980)年5月に、地元の歌人棚澤慶治らの働きかけで、星溪園を訪れた際に詠んだ歌です。

歌の意味は、「熊谷草がなくてはならないと星溪園に熊谷草を植えてふくやかな花を咲かせている」です。

鹿児島寿蔵

(かごしまじゅそう:1898-1982):歌人・人形作家

福岡県生まれ。紙遊人形の創始者で、人間国宝。歌人としては、土屋文明(1890-1990)に師事し、短歌誌『アララギ』の選者となりました。